Review

特別企画
「宮沢章夫のしごとなのだ」

永田 幹人

第26回早稲田表象・メディア論学会研究発表会（2023年6月17日）において、「特別企画：宮沢章夫のしごとなのだ」が開催された。これは、2022年9月12日に逝去した宮沢章夫先生の追悼のために、特別にプログラムされたものである。宮沢先生は劇作家、演出家、作家として旺盛に活動を続けながら本学の教員を務め、2016年から表象・メディア論系の教授として学生の指導にあたっていた。そんな宮沢章夫という人物の仕事を振り返りながら、氏の持ついくつもの顔を知ることが、本企画の趣旨である。

当日は三点の資料が配布された。一点目は矢内有紗氏（表象・メディア論コース博士後期課程1年）が作成した「宮沢章夫　上演作品インデックス / 宮沢章夫ビブリオグラフィー」。二点目は笠木泉氏（俳優、脚本家として宮沢と演劇活動を共にした）が作成した、宮沢の代表作のひとつ『ヒネミ』（第37回岸田國士戯曲賞を受賞）の脚本からの抜粋。三点目は筆者が本文を執筆し、安田和弘氏（表象・メディア論系助手）がデザインを担当した「宮沢章夫通信」である。このデザインは宮沢が担当した講義「サブカルチャー論」の配布された「サブカルチャー論通信」を模したものだ。

当日は、企画責任者である岡室美奈子氏（表象・メディア論系教授）による司会進行のもと、宮沢の「自己紹介」として、講義のために宮沢自身が作成した映像の一部が再生された後、4名の登壇者による講演がおこなわれ、その後フロアからも多くの発言がなされた。

まず、生前宮沢が表象・メディア論系で開講したゼミ（文化身体論ゼミ、宮沢自身は「虚学ゼミ」と自称していた）出身の教員・文筆家である谷頭和希氏が、宮沢の教育と笑いをテーマに講演をおこなった。谷頭によれば、宮沢は学生との活動や語り合いを重視し、むしろ学生はそこから「勝手に感じ取る」ような仕方で学んだという。とりわけ演習の際には、宮沢は学生たちの趣味や関心（ジャニーズを扱った発表が多かった）からもつねに貪欲に知識を得ようとしていた。そんな宮沢の姿について、谷頭は「不合理なことのおもしろさ」を見つけだす生き方、そしてつねに新しい文化を吸収していく姿勢にこそ多くを学んだと語った。さらに、宮沢独自の「笑

い」について、氏は「新・ニッポン戦後サブカルチャー史 番外編」(2021年2月に渋谷で行われた、Aマッソの加納氏とのトークセッション）の映像を紹介しながら、宮沢の「笑い」論（宮沢はゼミでもその理論をいつかまとめたいとつねづね学生に漏らしていたという）を誰かが受け継ぐ必要がある、と加えて講演を終えた。

次に登壇した丸山俊一氏は、サブカルチャーに対する取り組みという観点から宮沢の仕事を振り返った。宮沢が出演した「ニッポン戦後　サブカルチャー史」（NHK、2014-2016年）の制作にプロデューサーとして携わった丸山は、楽しくもあり、困ることもあったという宮沢の「横すべりしていく語り」を大事にしようとつねに意識していたという。「愛と独断に満ちたサブカルチャー論」というキャッチフレーズは、宮沢の自由な語りを最大限活かそうという意図から生まれたものだった。言葉を紡ぎながら新たな考えを生み出していく宮沢独自のスタイルゆえに、収録時間は毎回３時間近く（番組一回の放映時間は54分）に及んだという。丸山にとっても、宮沢はやはり「対話」に開かれた人物であった。実際、宮沢は番組初回ではサブカルチャーを定義するのに「中心」と「周縁」という図式を使っていたが、番組が進んでいくなかでこの図式も徐々に変化していった。収録が回数を重ねてから、丸山があらためてサブカルチャーの定義を尋ねると、宮沢から返ってきたのは「逸脱」というまったく新たなキーワードだった。

和久田頼男氏は宮沢の演劇作品を詳細に振り返りながら論を展開していった。1983年から始まる宮沢初期の舞台作品は、「シティ・ボーイズ」、その発展形である「ドラマンス」、さらに名を変えた「ラジカル・ガジベリビンバ・システム」といったユニークな集団のなかで育まれ、日本初のクラブである原宿のピテカントロプス・エレクトスという特異な場と結びついていた。「ラジカル・ガジベリビンバ・システム」がシーンとシーンを音楽によってシームレスに繋いでいく手法を採用したことは知られているが、宮沢はこのユニットでの活動により、日本で最初にモンティ・パイソン流の「おしゃれでかっこいい」笑いを成し遂げた人物と評されることになる。和久田はユニット名に「システム」という語が含まれることに注目する。ここには、意味の無い語を組み合わせ、既存のシステムをどう揺るがすかを考える当時の宮沢の姿勢が表れているという。宮沢は1990年に「遊園地再生事業団」を結成するが、この劇団では演劇経験のない（あるいは少ない）アマチュアの役者を積極的に採用しながら「かっこいい笑い」をさらに追求し、ミュージシャンの客演も多かった。また、宮沢はここで、神戸連続児童殺傷事件（1997年）、アメリカ同時多発テロ事件（2001年）、東日本大震災（2011年）といった日本社会全体に大きな影響を与えた事件をも題材に取り込んでいる。こうした傾向は、『14歳の国』(1998)、『ニュータウン入口』(2007)、『シティボーイズミック

スPRESENTS「西瓜割の棒、あなたたちの春に、桜の下で始める準備を」』(2013)といった作品に見いだせる。和久田によれば、宮沢の作劇の中心にあるのは「音」、「声」、「呼吸」に注目する独自の身体論であり、その視点はアマチュアの役者といういわば「訓練されていない身体」を積極的に採用したことにも表れている。さらに、宮沢自身が不眠に悩まされていたこともあり、「眠らない身体」／「眠る身体」をめぐる問いが彼の作品ではつねに重みを持つものだったことを指摘し、和久田は論を締め括った。

続くケラリーノ・サンドロヴィッチ氏が語ったのは、宮沢と過ごした80年代の日々についてである。1985年、ナゴムレコードを主催していた氏は、当時講談社の編集者だったいとうせいこうとライブで共演した。宮沢章夫の名を初めて聞いたのはその時だったという。宮沢の「かっこいい笑い」に強く憧れていたというサンドロヴィッチは、当時の宮沢と月に二回ほどファミリーレストランで話をするほどの仲になったというが、後に宮沢の活動拠点が「遊園地再生事業団」へと移行していくなかで、彼とのあいだには少しずつ距離が出来ていったと語る。印象的だったのは、サンドロヴィッチ氏が（谷頭氏の語った）宮沢のやり残した「笑い」の理論化について、「それは誰にも引き継げないのではないか」と述べた一幕である。「やっぱり宮沢さんのなかにしかなかったものってのはあるんじゃないかな」と語る言葉には、演劇人として宮沢と同じ時間を過ごした氏ならではの重みと説得力が感じられた。

続くセッションでは、宮沢章夫の言葉に触れることを目的とした、参加者全員による『ヒネミ』抜粋のリーディングがおこなわれたほか、笠木泉氏が提供した『ジャパニーズ・スリーピング』(2010)の映像も上映された。この映像には当日会場に集った俳優たちの姿もあり、上映後には、それぞれが宮沢との思い出を口にした。

まず、宮沢の京都造形芸術大学時代の様子や、舞台制作の思い出について語ってくれたのは、「遊園地再生事業団」のメンバーたちである。今野裕一郎氏は、宮沢のエピソードとして当時の稽古での出来事を回想した。役者を志していたわけではなかった今野は、宮沢の稽古でも思うように動けなかったというが、そんなとき宮沢にかけられた「今野は今野でいいんだ」という言葉にとても安心したことをよく覚えていると述べた。橋本和加子氏、宮崎晋太朗氏、相馬称氏からも宮沢の包容力のある笑い声の記憶が語られ、三坂知絵子氏は、各メンバーが自身の所属劇団で日頃おこなっている準備運動や練習法を持ち寄った独特な稽古が、大変刺激的なものだったとふり返った。いずれも、異質なものをつねに当たり前のように受け入れ、それを楽しむ宮沢の姿勢を窺わせるエピソードである。また、大塚健太郎氏によれば、宮沢はつねづね、演劇というジャンルや、そこで当たり前に用いられている言葉を疑い、そこからこぼれ落ちるものに目を向けるよう促し

ていたという。大塚は、そうした宮沢の眼差しが現在の自身の仕事の姿勢を形作っていると語った。

これに続くかたちで、宮沢の「文化身体論ゼミ」（別名「虚学ゼミ」）出身者を中心とする教え子たちと、表象・メディア論系の教員たちによって、早稲田大学時代の宮沢との思い出が語られた。細馬宏通氏が語ったのは、早稲田大学に着任する以前のある印象的なエピソードだった。細馬は1994〜95年頃に、HyperCardと呼ばれるMacintoshのソフトウェアのプログラミングを行う国際バカスタック協会で、氏いわく「ろくでもないソフトばかり作る」活動をしていたというが、その「あまり人の目に留まらなかった」仕事をいち早く「これは変なのが現れた」と取り上げたのが、他ならぬ宮沢だったという。モンティ・パイソンやテックス・アヴェリーなど、宮沢と関心が重なる点も多かったため、「もう30年早くお話しできていたら」と惜しみながら細馬は話を結んだ。

続く長谷正人氏は、自身の受けた「宮沢章夫ショック」について回想した。長谷はオムニバス形式の講義「メディア論」でのディスカッションにおいて、宮沢のスライドと映像を織り混ぜた語りを前に「学生と一緒に爆笑するしかなかった」と語った。そしてこの宮沢特有の「サブカルチャー的な言語とセンス」に打ちのめされた経験は、長谷氏が表象・メディア論系で仕事をするうえで決定的な影響を受けた出来事となったという。同講義を担当する岡室氏も、「内田裕也問題」を取り上げた宮沢のプレゼンテーションを例に挙げ、その完成度に毎回打ちのめされる思いがしたと同時に、それを心から楽しみにしていたと振り返った。

このあと、本企画の運営に携わった工藤顕太氏（表象・メディア論系講師）が代読するかたちで、宮沢の作品に数多く出演した上村聡氏、笠木泉氏からのメッセージが読み上げられたが、いずれのメッセージも胸を打つものだった。

上村氏は、公演の打ち上げで関係者全員へ配られる宮沢のメッセージ入り舞台写真について語った。上村氏はある舞台で濁声で話す演技を求められたことがあった。上村氏は、唐突に濁声になるこの演技を稽古のなかで一度は成功させたものの、その後はなかなかうまくいかなかったという。失敗するたびに宮沢は「上村、あの人はどこにいったんだ」、「よく魚河岸にいる、あれだよ」などと声をかけた。その公演の打ち上げでもらった宮沢からの舞台写真には、「あの人はどこにいったのか。それを考えることが君の次のテーマなのかもしれない」というメッセージが書かれていた。上村にとって宮沢は、演技がうまくいかなかったとしてもそれを責めることなく受け容れてくれる包容力と、役者に自身の実力を受け止めさせる厳しさとを併せ持つひとだったという。上村はこちらもつられて笑ってしまうような宮沢の「ずるい」笑顔を回想しながら、たくさんもらった分もっと言葉を返したかったと語っていた。

笠木泉氏は「遊園地再生事業団」のオーディションを振り返った。宮沢は様々な背景や関心を持つオーディション候補者たちと毎週フィールドワークをしていた。笠木氏は宮沢とともに街を歩き、あてもなく「ふざけたこと」を考えることがとにかく楽しく、そのときに「本気で宮沢さんのもとで俳優をやってみたい」と思ったと語った。宮沢は笠木に、演劇についてよりもむしろ世界の見方や面白さを教えてくれたという。宮沢は笠木の戯曲が上演される際にはいつも足を運んだ。そして観劇の後には決まって「よかった」と伝えた。宮沢が亡くなった後、笠木は早稲田の研究室の片付けを手伝いに行った。宮沢のデスクには、授業で配布するための資料が置かれており、そこには、笠木の書いた『モスクワの海』（2021 年）についてのコメントが記されていた。それを見つけたとき笠木は、宮沢の不在をそれまで以上に痛切に感じたという。

最後に、生前宮沢を誰より近くで見ていた宮沢千景氏の言葉で会は締め括られた。千景氏は、宮沢が早稲田の教員の職を打診され、これを引き受けるべきか非常に悩んでいた当時のことを回想した。自身を表現者とみなしていた宮沢は、研究者のポストのひとつを自身が占めることに躊躇していたというのである。しかしそれは、宮沢の研究者に対する「憧れ」や「尊敬」によるものでもあったという。だからこそ、教員となったあとの宮沢は研究者と学生たちに囲まれる環境をつねに楽しんでいた。千景氏は「とにかく学校であったことを家でよく話していた」宮沢の姿を振り返りながら、感謝の言葉とともに話を終えた。

本企画は、多方面に広がる宮沢先生の活動を、彼を慕う人たちともにふり返るあたたかな機会となった。先生の活動は長い時間のなかで変化を続け、分野の壁をすり抜けてしまうような多様さを持っていた。だが、「笑い」への独特の視座や不思議な語り口、そしてなんとも言えない親密さを紡いでいく周囲との関わりなど、宮沢章夫という人物とその仕事には、絶えず鳴り続ける通奏低音のような魅力があったように思う。筆者の記憶に残っているのは、キャンパスでも一番大きな教室で、大音量でミュージックビデオを流しながら講義を始める宮沢先生、あるいはどんな学生の発表も興味に持って傾聴し、楽しそうに質問する宮沢先生の姿である。本企画に参加して何より嬉しく感じたのは、自分が教え子として聴いていたあの語りと笑い声が、会場に集った人たちの言葉のなかに鮮やかに甦ってきたことだった。

（ながた・みきと　早稲田大学大学院文学研究科 修士課程）